

# 学生の意識の変化と語学教育

## Some Changes in Students' Ways of Thinking and Their Effects Upon Language Education

付岡 京子\*

Kyoko Tsukeoka

### 1. 序

前期末、本学英語専攻の学生に対して、学生の意向をカリキュラム改定に反影させたいとの意図のもとに、専攻の専門教育科目の内、必修及び選択必修科目を対象に、無記名でアンケートを実施した。アンケートそのものの妥当性の検討、全体の集計・分析はまだ終了していないが、筆者の担当科目の集計結果を通してのみ限り、学生の要望と教える側の意図との間に、かなりの隔たりがあるという現実が浮き彫りにされたように思う。筆者の科目の目標設定に再考の余地があるらしい事は厳粛に受けとめねばならないが、まず両者の間には、現状認識からしてずれがある。あれだけ授業中の私語が激しいのに、自分の受講態度を悪いとみている学生は皆無に等しい。ちなみに音声学に関しては、英語専攻全員の内、一名しかいない。驚いた事に、63%強の学生は、自分の受講態度を普通として受けとめているのではなく、積極的に良いと思っている。

学生が学校に来るのは勉強する為と単純に思いこんでいた筆者には、「わかりません。」「予習してありません。」と悪びれもせずに堂々と答える学生、指名されてから大勢の学生を待たしておいて、おもむろに辞書をひきはじめる学

生の気持が、理解できなかった。ましてや教師が教室に入っていてもどこ吹く風。ファッションの話、アルバイトの話等、情報交換に熱中して、私語を止めようとせず、一向に授業を受ける態勢に入らない学生の割合が多いのには、啞然とした。授業中も、指名されて答える学生の声、私語にかき消されて聞こえない程の凄まじさである。私語をしている時には大きな声を出しているのに、いざ指名されると、聞こえるか聞こえないか位のか細い声でしか答えられない学生も多い。勿論社会人入学者を中心に、なかには私語を勉強の妨げになる、迷惑だと受けとめている学生が、本学にも少数ながら存在する事も事実である。しかし現実には、残念ながらそういう学生は、ごく少数でしかない。大多数の学生は、私語をする事をごく当たり前の事として、受けとめているように思われる。

かつてある学校で、余り私語が激しいので、「私語をしたいのなら、もう出席もとった事だし、出て行ってかまわない。」と学生に告げたところ、一人も出て行こうとしないので、何故出て行かないのか、学生と話合った事があった。特に授業の内容をどうしても聴きたいというわけではないが、教室にいる方が何となく安心感があるので、出て行くだけの勇気がないという事らしかった。私語によって、他の学生に迷惑

をかけているとは思わないのかと尋ねても、「どうしても私語はやめられないので、後ろの方でさせてほしい。」といわれたのには、一瞬返す言葉を失った。教室後部からも声は聞こえるのだという事を伝えても、理解できないようだった。世間では一流といわれているある大学でも、教師が私語をしている学生に教室から出るように告げたところ、机にかじりついて、どうしても出て行こうとしなかったという話をきいた事もある。つまり学生には、教室内の私語は他人に迷惑をかけるという認識がないようだ。それ故、授業中の私語は慎むべき事だとの認識に欠けている。

ところで、2年次の英語表現Ⅱの最後の時間に、毎年“Looking Back Upon Two Years at Kyoei Gakuen Junior College”という題で、英語で感想文を書かせているが、ほとんどの学生がよかった事として挙げているのは、これから先もずっとつきあっていける友達ができただけである。学校生活を通して友人を得るという事は、いつの時代でも学校生活の大きな利点である事には違いないが、本学の場合、友達との交流が、専門の勉強もとんでしまう程圧倒的な比率を占めている点が特徴的である。筆者が非常勤で教えに行っているある四年制大学で、一年次の終わりに、科目名は異なるものの、内容は英語表現と同等の科目で、大学での一年間をふり返らせて書かせると、まず専攻科目の自己の中での位置付けと、将来の仕事への関連付けが来て、それに加えて友人関係、師弟関係がくる事が多い。ところが本学の場合、本当にやりたい事がみえていない。四年制編入希望で相談に来る学生でも、何を専攻したいのか分っていない場合すらある。

入試の面接では、英語専攻志望者のほとんど全員が、英語が好きだと明言する。又どんなに大変でも予習はするといいきる。更には将来英語を生かした職業につきたいという者も多い。ところがいざ入学すると、予習も与えられた課題もせずに、授業に出てくる学生が多数を占める。アルバイトをしたり、遊ぶ時間はあっても、

勉強する時間は見つけにくいという事らしい。音声学の時間で、日常よく耳にするような短いスキットを毎回暗記させ、二人づつ組んで発表させているが、暗記をしてこずに、堂々とテキストをみて読んでいる学生がかなりいる。注意をすると次回は暗記してくる学生の数もふえ、やはり注意すると効果があると喜んだのも束の間、しばらくすると又元の木阿弥になり、平気でテキストをみて読んでいる学生がいる。課題の会話文は、最近の状況に合うように近年改訂されたばかりのごく日常的によく使われるものであるにもかかわらず、独力では意味がよくとれず、従って暗記する事が難しいようである。授業中に一応説明して、大体の状況や意味は解説しておくものの、いざ暗記しようとする構文がよくわからず、丸暗記になってしまうので、暗誦が大変らしい。これ迄習った文法の知識を生かして取り組みれば、理解も手易く、しっかり理解できれば、それだけ暗誦も楽になるはずだが、ともかく丸暗記をというのでは、いくら記憶力がいい年代とはいえ、大変であろう事は想像にしくはない。

この程度のスキットの暗記に四苦八苦しているという事は、如何に英語の基礎力がないまま、入学してきてしまったかという事になる。文法の知識も不十分、語いも極端に貧弱な状態では、予習しようにも予習のしかたもわからない学生が、かなりいる事に対処する事を迫られているわけである。高等教育を受ける年代になれば、普遍的な法則を活用して知識を体系化し、広げていく事が、より効果的な学習につながると考え、その方向にそってこれ迄教えてきたが、学生のこの現実を前にすると、再考を要するのではないかと思うようになった。語いを体系的に広げられるようにと、接頭語や接尾語の話をして、少数の例外的な学生を除いて余り興味を示さないし、テープに録音させても、練習時間が授業時間内に組み込まれていない限り、学生の自発的な発音練習も、大多数の学生には期待できない。このような状況の中で、どのようにして学習意欲をかきたてたらよいかという難

間に直面する。一を聞いて十を知るという事は概して期待できないようで、極端な表現をすれば、手とり足とり一から十迄教え込む事を期待されているような気がする。しかも楽しく聞けて自然に覚えられる事を期待されている。

冒頭に述べたアンケートに記載された意見をみても、「もっと気楽に受けられるような授業にしてほしい。」というのがあった。又別の先生の科目のアンケートに寄せられたものの中には、「唯座っているだけで、覚えられるような授業にしてほしい。」という極端な意見もあったときく。いってみれば、努力をしないで身につく授業を期待している事になる。授業を面白くする工夫は勿論必要だが、教師は漫才師ではないし、勉強と娯楽は同列ではないと筆者などは考える。どうも最近の学生をみていると、省エネというのか如何に楽をして単位をとるかに関心があって、努力には価値をおいていないように思われる。確かに近頃は、聴くだけで英語が身につくというような宣伝文句等も新聞等で目にするが、筆者自身が実際に受講したわけではないので、その真偽の程はわからないものの、大人が受身な受講態度で果たして身につく勉強ができるのか、筆者には疑問である。

## 2. 高等教育の大衆化

ところで、1994年度の文部省の学校基本調査によれば、大学・短大の入学者の合計は4000人減で、18才人口の減少による「大学冬の時代」の到来が現実になりつつあるものの、浪人生を含む短大・大学への進学率は、これ迄最高だった昨年度の40.9%を更に2.4ポイント上回り、43.3%となったという事で、特に女子のみの進学率をみると、短大を含む為、45.9%と更に高い<sup>1)</sup>。つまり半数近くの女性が高等教育を受ける事になる。

進学率が10数パーセントから20パーセント位の限られた人数のエリートの為の高等教育の時代にあっては、学ぶ意欲が旺盛でチャレンジ精神に富んだ学生が大多数を占めていた。教師か

ら学生に教えるだけでなく、学問を通してお互いに学び合い、影響し合う部分が大きかった。教え方に特別の工夫はしなくても、学生の方が自然に学びとってくれるという、いってみれば大人の教育が存在した。それは学生の資質に負うところが大きかったのであろう。しかし現在のそのような進学率43.3%という高等教育が大衆化した時代にあっては、このような事は望むべくもない事なのであろう。現在は高等教育にあっても、その教育力がこの他問われている。面倒見のよさがキーワードといわれ、楽しく勉強できるような教え方が求められる。まさに大学教育が中等教育化しているといわれる所以であろう。

筆者等は、高等教育は義務教育ではないのだから、学ぶ意欲のない学生が入ってくる事事態が間違っていると思っていたものだが、現実には四年制大学の場合でも、学問をする為に入ってくる学生はごく一部でしかない。ましてや短大の場合、理想論ばかり追っているわけにはいかない事を、最近とみに痛感する。高等教育の大衆化に伴い、学生は様々な目的を持って入学してくる。勉強そのものにはそれ程興味がないにもかかわらず、キャンパスライフに漠然とした夢を抱いて入学してくるものも少なくない。むしろ本学等は、こういった学生が大半を占めるのであろう。求めるものが異なる学生に、勉強する事を目的として入ってきた学生と同じ目標設定をし、同じ教え方をする事自体が無理なのであろう。現状は遊園地化していたり<sup>2)</sup>、高等保育機関といわれるような状態でありながら<sup>3)</sup>、皆同じ高等教育研究機関であるという戦後の平等主義の幼想のもとに<sup>4)</sup>、現実とかけ離れた理想論を追ってばかりいては、教育の実はあがらない。どのような学生を迎え入れ、迎え入れた学生に対してどのような教育をするのか、感性の時代といわれる今の若者の生態や意識の変化を直視し、中等教育化といわれようが、現実にもあった教え方を工夫しなければならない時代にきている事を、認識せざるを得ない。

ところで、過去十年位の受験生の動向を観察

して、旺文社専務の代田恭之氏は RENTAL 症候群と名付けている<sup>5)</sup>。R は riskless の頭文字で危険なところには行かないという意味。E は和製英語で energy saving, つまり省力化。N は novelty で、つねに何か新しい珍しいものを求めているという事。T は togetherness 一体感の頭文字で、同程度の偏差値の者が一緒にほだほだの大学に入る傾向をさし、これが均質集団、同歩調の所謂入試の輪切りを生むと氏はみている。A は amenity で、学校環境、学生サービスの良さ、快適さを意味する。L は look and location で、見てくれと距離の問題であるという。ここに描かれている受験生の動向は、現実の学生をみていると、思いあたるふしが多い。代田氏は、この動向は今後もそう変わらないだろうとみている。

### 3. 日本私立短大協会による意識調査の概要

ここで短大の英語教育に焦点をしばって考えてみたい。日本私立短大協会外国語教育研究委員会が、1991年10月に『短大英語・英文科系学科における英語教育に関する学生の意識調査(2年生対象)報告書』を出している。この報告書は、英語・英文科系の短期大学における英語教育の改善に的をしぼり、2年次に在籍している学生を対象として、全国規模で1991年5月に実施されたものである。従って調査の対象となった学生は、正確には短大に入学して1年余りを過ぎた学生という事になる。同委員会は10年前にも同様な調査を実施しており、比較すると、かなり問題点がみえてくる。

まず短大を選んだ理由であるが、「自分のライフ・サイクルには2年の大学教育が適当と考えた」が複数回答ながら46.8%で第一位となっており、10年前の19.0%から飛躍的に上昇している。この事は、この10年間で学生の意識が大きく変わってきている事を示しており、短大教育は卒業後の多様な人性設計に対応しやすいだろうとの進路選択時の学生の漠然とした考え

方を示しているのではないかと、報告書は分析している<sup>6)</sup>。一方順位としては5位にあるが、「四年制大学の入試に失敗した」が、前回の15.6%から今回22.8%とふえており、学生の四年制大学指向が伺われる。

次に、現時点で感じている短大教育の有利な点に関しての回答では、「就職しやすい」が46.3%で第1位、「経済的負担が軽くすむ」が38.9%で第2位と、現実的な利点が上位を占めており、前回45.6%あった「教養を身につける事ができる」は30.9%と後退し、25.2%の「実用的な能力を身につける事ができる」と合わせて、地域差はあるものの、実質的な利点が現実的な利点におさされている所が、10年前と大きく違ってきている。不利な点に関しては、10年前には31.5%であった「2年間では十分な知識が得られない」が、今回は55.7%と急激に上昇し、第1位を占めている。第2位は「短大卒では英語を生かした職業につきにくい」で42.6%、続いて「科目選択の自由が少ない」も42.0%と今回高い数値を示している。第4位の「社会的評価が低い」も34.7%あり、バブル崩壊前の1991年においてすら、厳しい現実を学生自身が実感しており、「教養」「実用的な能力」共に2年間では不十分だと、学生自身がよく認識してきている事を表しているといえよう<sup>7)</sup>。

英語・英文科志望の動機としては、「英語が好きだった」72.2%、「語学力及び国際感覚を身につけたかった」68.0%が群を抜いて上位を占めている。続いて「英語を生かせる職業につきたいと思った」が46.5%で3位につけている。一方、前述の「短大卒では英語を生かした職業につきにくい」という現実があり、報告書は学生の入学時の目的意識が生かされるようなカリキュラム編成が今後求められると分析している<sup>8)</sup>。志望動機に連動して、入学時に勉強しようと思った事として第1位にあげられているのが、「英語が話せるようになる事」で59.8%、第2位は「商業英語など実用英語系列のもの」で15.0%、第3位が「英語学・英文法など語学系列のもの」で10.7%と続く。つまり1位から

3位迄、実用語学系列のものが占めている。その後1桁台に数値が落ちて、「小説やドラマなど文学系のもの」7.0%、「英語専門科目とあわせて一般教育科目」4.4%、「地域研究や国際関係などの系列に関するもの」2.6%となっている。これ等文学教養系列のもの、上記実用語学系列のものとの間には大きな隔りがあり、学生の入学時の学習目標が、コミュニケーションの手段としての英語習得にある事を明確に表すものと、報告書は分析している<sup>9)</sup>。

次にカリキュラムに関し、「読む」「書く」「聴く」「話す」それぞれについて、現行カリキュラムでの満足度を調べたところ、「読む」>「書く」>「聴く」>「話す」の順に満足度が落ちており、学生の要求が会話を中心とした日常英語へと向けられている事実が否めない事を報告書は指摘している<sup>10)</sup>。今回の調査に現れた専門科目の中での学生の理想とする各分野の割合は、会話力37%、実用英語18%、語学系列16%、国際関係15%、文学14%となっている<sup>11)</sup>。会話と実用英語で、専門科目全体の55%以上を占める事を学生が希望している事になり、この方面に対して、学生が如何に関心を向けているかが伺われる。尚、専門科目の内、必修、選択必修、自由選択科目の割合に関しては、必修科目、選択必修科目共にそれぞれ30%どまりでよいと考えており、むしろ自由選択科目をふやしてほしいと望んでいる事が読みとれる。

又英語以外の外国語を勉強したいと考えている学生は58%もあり、半数以上の学生が希望しているという結果が出ている。具体的には希望の多い順に、フランス語61%、ドイツ語43.9%、スペイン語36.6%、中国語29.2%と続く。英語以外のいろいろな外国語に対する学生の関心を、報告書は衛星放送を通じて様々な国の言語に触れる度合いが増した事、海外に出る機会がふえた為に、英語以外の外国語を勉強する事の必要性や意義を学生が感じるようになった事の反映と分析している<sup>12)</sup>。

授業の形態に関しては、「視聴覚教材を中心とした授業」(33.5%)と「セミナー方式の授

業」(30.3%)が学生の人気が高く、「講義だけの授業」13.0%、「講義を中心とし、質疑応答を加えた授業」11.8%と続いている。調査に当たった研究委員会が最も進んだ形態と予測していた「複数の講師による総合的な授業」は2.2%で最下位、「学生中心の授業」も8.0%と人気がないという結果が出ている。学生の好む授業形態の第1位が、視聴覚教材を中心としたものであるという事は、マルチメディアが教育界に大きなインパクトを与える事が予想される昨今、従来の視聴覚メディアのみならず、今後はCD-ROM、レーザーディスク、VTRなどとパソコンというように、複数の機器を組合せて、映像、音声、文字などを提示するマルチメディアが、英語教育においても脚光を浴びてくるものと思われる。

次に外国人教師による授業に関する調査では、半数近くの学生が、英語の授業は外国人教師に担当してもらいたいと考えているという結果がでて一方、外国人教師の授業を選択科目にすると、選択する者が減少するという実態調査の結果がある事も、報告書は指摘している<sup>13)</sup>。この事は本学における経験でも裏付けられており、かつて2年次の英会話が選択科目であった頃、1桁の履修者しかいなかったという時期があった。入学の動機としては、外国人による少人数制の英会話がある事をあげている受験生が多かったにもかかわらず、実際に自分が選択する立場になると履修しないという実態が出ている。つまり希望と現実の行動が一致しないという矛盾が存在する。更に外国人教師の授業に学生が求めているものをみると、「日常会話の基礎的訓練」が47.7%と、第2位の「英語によるディスカッション」18.6%を圧倒的にひき離し、第1位である。「異文化にふれる機会」は10.4%、「人間的な触れ合い」10.1%、「国際感覚の養成」7.7%と続いている。討論を求める者は20%弱で、50%近くが単なる日常会話という結果は、高等教育機関としては考えさせられる数字ではなかろうか。

尚、各種検定試験に関する調査では、受験率

は全国的に90%をこえており、英検（STEP）がその90%以上を占めている。受けた時期は短大1年が53.1%で1位、高校時代が51.6%で2位、中学時代38.3%で3位となっている。受けた等級は、3級が最も多くて47.1%、2級で35.7%、ついで数値は急激に落ちるが、4級6.6%の順であった。更に今後受けたいと思う検定試験に関しても、英検が93.7%と群を抜いており、等級別には2級が54.6%で1位、ついで準1級が27.8%で続いている。特に就職難の昨今は、就職に際して資格がものをいうので、大学の単位に換算する案も出ている等、一定の社会的評価を得ている英検の活用が、ますます盛んになるものと思われる。又受験者数ではまだ4.8%とごく少数だが、TOEICの得点を採用の際考慮する企業も増加しているといわれる。しかし残念ながら、受験者の最多得点と就職に有利とされる点数の間には、未だ大きな開きがある。又留学の為の英語実力判定 TOEFL に関して、最多得点は401～450点で、留学に必要な最低点500点にはまだ達していない。しかし受験希望者はTOEFL 27.6%、TOEIC、22.1%と、それぞれ1/4前後の学生が受験の意欲を示しており、これ等の試験を学生の勉学意欲の刺激剤としてとらえ、学校側が対応する事も必要であろうと、報告書は提言している<sup>14)</sup>。

最後に短大の今後についての学生の希望をみると、「実用面を充実してほしい」48.6%、「交換留学制度を取り入れてほしい」45.0%、「四年制大学に編入しやすくしてほしい」及び「三年制にしてほしい」がそれぞれ30.3%、「男女共学にしてほしい」23.9%、「教養面を充実してほしい」22.4%となっている。尚、約90%の学生が、何等かの形で短大卒業後も学習を続ける事を考えているという結果が出ており、英語は生涯教育が最も必要な科目なのだろうと、報告書は分析している<sup>15)</sup>。

#### 4. 本学英語専攻の活性化に向けて

前項でみてきた日本私立短大協会の意識調査報告書を参考に、本学英語専攻のかかえている問題のいくつかを、開学10周年という節目に、筆者なりに考えてみたい。

まず実用面の充実に関しては、本専攻では逸早く、ビジネス英語、貿易実務論等の実務科目の必要性に配慮して専任人事をおこし、ついで専任の外国人教師の採用により、学生の要望の強い英会話の充実をはかってきた。今後は、不況の最中の就職難の時代を乗り切る為にも、社会的にもそれなりの評価を受け、就職試験においても資格としてカウントされる英検2級、ないしは本年から実施される事になった準2級の取得に向けて、専攻としてより踏み込んだ指導の必要性があるとの専攻内での一致した見解のもとに、授業内容の見直しを行っている。これ迄も英検の練習問題集やテープを、LL教室や資料室に用意しておいたものの、一部の学生を除いて余り利用していないというのが実状であった。従って十分な準備もせず、唯受けてみるという事をくり返していたのでは、残念ながら結果が出なくても不思議はないといわざるを得ない状態であった。高等教育なのだから学生の自主性に委ねて等といったのでは、いつになっても合格率はあがらないと認識せざるを得なくなった。中等教育化といわれようと、これが学生の現状である以上、実際に授業中に過去問を練習する時間を設け、やらせる必要があるとの合意のもとに、英語表現Iの時間の一部をさいて過去問を解かせる事、更に夏休みにも過去問を宿題にして、夏休み明けにテストをする等、就職に結びつく資格試験を刺激剤にして集中させ、学習意欲をかきたてる事が有効ではないかという事で、早速本年から始めている。程無く当面の問題となる就職に結びつく資格試験という具体的な目標を持つ事で、学生が学習意欲を持ち、目的に向かって地道に努力する習慣を身につけてもらえればと願っている。首尾よく目指す等級に合格すれば、それが又自信に結

びつき、更なる発展へとつながっていくのではないかと期待している。概して本学の学生は、努力しないで英語が話せるようになりたいと思っているようだが、語学はやはり努力なしには身につかないと、筆者は考えている。如何にして努力する習慣を身につけるか、本学の学生にはその糸口を見つける手助けが必要なように思う。

すでにみてきたように、前述の全国規模の意識調査でも、今の学生は視聴覚教材に非常に興味を持っているという結果が出ていたが、本学のアンケートでも、視聴覚機器をもっと利用した授業を受けたいとの希望が多かった。筆者等は、機械を通すと音質が変わるので、授業は肉声の方が効果があるように思っていたが、CAI (Computer Assisted Instruction コンピューター利用教育) の時代に育った世代だけに、今の学生は機器に慣れる事も速いし、遊び感覚で親しみを持っているようだ。今マルチメディア元年といわれる中で、今後マルチメディアを駆使した具象的な教育が普及してくるだろうと予想される。反面筆者等は、従来の抽象的な概念を中心に教える教育の占める割合が少なくなる事を懸念している一人だが、非常に具象的な形でものを教える事ができるという事は、今の学生の生態や動向には合っているように思われる。

次に全国的に希望の多い交換留学制度について考えてみたい。本学では夏に3週間の海外研修制度があり、毎年20数名の学生が参加している。プログラムが語学研修中心の事もあって、英語専攻の学生の参加が多いが、参加した学生にアンケートをとってみると、英語力に関しては余り伸びなかったと答えているものが多い。団体で行き、一緒に大学の寮に滞在すると、唯場所をアメリカに移しただけで、実際の生活環境は日本にいるのと余り変わらない事になってしまう。やはり個人として独り異なった環境に放りこまれてはじめて実のある研修が可能になると、筆者等は考えている。その為には旅行社任せの唯単に大学の施設をかりるだけの海外研

修ではなく、先方の大学と直接交渉し、本学の意図をよく伝えたプログラムが組めるような研修が望ましい。

特に昨今は、外国の言語や文化の吸収だけでなく、発信型の教育が求められている。外国に出た場合に、日本の言語や文化を外国人に伝えられるような教育が必要ではないだろうか。この度本学が行った改革の中で、基礎教養科目に日本文化史が加えられた事は、この線にそった科目設定であり、英語専攻が履修する事が望ましい科目として指定したのは、この意味からである。海外研修が単なる短期間の研修に終わらず、交換留学制度へと発展していく為には、外国人がわざわざ日本に来て学ぶ意味のある科目が、本学に設置されている必要がある。その意味でも日本語教育関連科目の開設が望まれる。

日本の経済力が強くなるにつれ、日本語学習熱は高まっている。しかし日本人だからといって、誰でも日本語が教えられるわけではない。英語を母語とする人が外国人に英語を教える場合、ESL (English as a Second Language 第二言語としての英語) のコースをとる必要があるように、日本語の場合も、母国語としてではなく、外国人に教える為の外国語としての日本語、言いかえれば世界の諸言語の中の一言語としてみた日本語を学ぶ必要がある。それは日本語を客観的にみる事にもつながり、英語と比較する事を通して、英語学習にも好影響を与えるものと予想される。本学には近年留学生も在籍しており、学生の中にも現に将来外国人に日本語を教える日本語教師になりたいと希望しているものもかなりいる。過日、公開講座の受講者からも、懇談会の席上、日本語教育講座の希望が出された。日本語教育は時代の趨勢であり、姉妹校や交換留学制度を作る上で、日本語教育関連科目の開設は、その前提条件となるものと考えている。又本当に勉強したいと思っている優秀な学生には、奨学金を出して留学させる制度を作る事もよいのではないだろうか。現実的な目標を持つ事は学生の励みにもなるばかりでなく、志願者を集める際、数は少なくとも優秀

な学生を本学に引きつける事にもなり、ひいては本学の活性化にも寄与するのではないかと考える。

尚、英語以外の外国語科目に関しては、前述の全国的な調査で、フランス語、ドイツ語、スペイン語の希望が多かった。本学には第二外国語として既にフランス語と中国語が開設されているが、今回専攻で行ったアンケートの結果では、更にスペイン語とドイツ語の開設を希望するものが、かなりの数にのぼった。学生のこういった興味に応じて、たとい導入だけに終わるにしても、若い頃にいろいろな言語に触れる機会を与えるという事は、何年か先、あるいは何十年か先に再び始める場合にも、学習を容易にするという事が脳生理学的にもいわれており<sup>10)</sup>、意味があるものと思われる。「これから大学間の差別化が行われるとき、その大学の外国語教育の姿勢がきわめて重要なポイントになる」<sup>11)</sup>という指摘もある。短大ではまだ珍しいスペイン語やドイツ語の外国語科目の開設は、新奇を追う近頃の若者の動向にもマッチするものであり、本学の特色作りにも役立つものと考えている。更に言葉はまさに文化であって、これ等の言葉の学習を通して、背景となる考え方の相違を知り、広くそれぞれの国の文化に学生の興味を呼び覚ます事ができれば、より広い教養を身につける事にもつながるのではないかと期待している。

短大教育を通して、筆者は単なる知識の詰め込みではなく、学生に自分で考える力を養ってほしいと願っている。その為には、受身に与えられる事のみ求めるのではなく、謙虚に学ぼうとする態度が必要なのではないだろうか。受身では本当の意味での学ぶ喜びは味わえないのではないかと思う。教師は補助的な役割しか果たせない。主役である学生が自分で努力する事の大切さを知ってほしいと願っている。とめどのない私語に象徴されるように、唯欲求の赴くままに行動するのではなく、素直な心で謙虚になって自分自身を律する事こそ、教養の意味するところではないかと考える。自己評価が以

外に高かった今回のアンケートの結果をみて、素直さ、謙虚さ、柔軟さが欠けているのではないか、こういうところが就職試験の面接にも案外出ているのではないかと危惧をもった。なかには頭から異質なものは寄せつけず、異なった価値観は排除しようとする態度の感じられる回答もあり、人間性の問題と深く係わっているのではないかという気がしている。今後マルチメディア教育が始まれば、ますます個別的な教育になり、人間関係、人間性の問題がないがしろにされる危険性が出てくるのではなかろうか。それに対してどのように対処をするのか、これは学校教育に課せられた大きな問題となるのではないだろうか。

問題は多岐に互り、本稿で論じつくせるものではないが、受け入れた学生の教育に責任をもってあたり、送り出さねばならない教員の一員として、身を引き締めて授業に臨まねばならない事を痛感するとともに、これからも学生の声に謙虚に耳を傾けながら、現状の中で可能な事を積み上げて、専攻の活性化に向けて模索を続けていきたい。

#### 注

- 1) 朝日新聞(東京), 1994-08-13朝刊1面.
- 2) 藤原書店編集部編『大学改革とは何か』(藤原書店, 1993年) 207 ページ.
- 3) 同書, 181ページ.
- 4) 同書, 182ページ.
- 5) 朝日新聞(東京), 1994-08-14朝刊10面.
- 6) 日本私立短期大学協会外国語教育研究委員会『短大英語・英文科系学科における英語教育に関する学生の意識調査(2年生対象)報告書』(日本私立短期大学協会外国語教育研究委員会, 1991年) 14ページ.
- 7) 同報告書, 18ページ.
- 8) 同報告書, 20ページ.
- 9) 同報告書, 22ページ.
- 10) 同報告書, 30ページ.
- 11) 同報告書, 37ページ. 円グラフ参照.
- 12) 同報告書, 44ページ.



- 13) 同報告書, 48ページ.
- 14) 同報告書, 65ページ.
- 15) 同報告書, 87ページ.
- 16) Wilder Penfield and Lamar Roberts,  
*Speech and Brain-Mechanism*, (Princeton  
University Press, 1959), p.242.
- 17) 藤原書店編集部, 前掲書, 165ページ.